

彙報

新著紹介

社會學會例會

坂口教授、「概観世界思潮。」

九月三十日午後六時より新會員歡迎會を兼ね本學年第一列會を開催す

利益分配法の根本原理に就て

山崎榮次郎

右講演終りて歡迎會にうつる。十時散會

當夜の出席者は米田教授を始め本年卒業されし白井學士村田太平氏及學生等十數名なりき。

印哲宗教學會

十月十九日(火)年後六時より文學部第六教室にて例會を開き次の講演を行へり。

佛教史上より見たる日鮮關係

手島 文學士

鹿野苑の遺跡

松本 教授

數年の昔、「世界に於ける希臘文明の潮流」は、私に鮮かな印象を残した。かの書の著者が導いてくれた舟路に於て經驗した、潮の音、波の色、藻の香を私は今でも懐しいものとして感ずることが出来る。この夏私は同じ著者の「概観世界思潮」を讀む機会をもつた。そして私は端無も「われは夏日の永きを愛す」と云ふ古人の言を想起したのである。

この書が私達に與へようとするのは、「正確なる知識に基きたる世界史の教養」である。それでは世界史とは一體何を意味するのであるか。それは最、包括的な歴史の謂であるか。政治史、經濟史、文學史、美術史などが記載し、叙述する事實を、唯漏なく網羅するのが世界史の任務であらうか。或はそれは最、概括的な歴史の謂であるか。あらゆる個人、一切の社會、國家、民族などの歴史に共通なるものを明らかにするのが世界史の課題であらうか。アナトール・フランスの波斯王の寓話は、「恰もこれらの間に巧に答へてくれるかのやうに見える。世界史の目的が若し前者にあるとすれ

ば、王の史官が最初に必要としたやうに、「私達は世界史の典籍を一部載せるために十二の略駝をもたねばならぬだらうし、また若しそれが後者であるならば、史官が最後に王に云つた如く、私達は世界史の知識を求めらる者に對して、「人は生れ、苦しみ、死す」と云ふ三語を興へる外ないであらう。いづれにせよ、これらの場合世界史は不可能であるか若くは無意味である。歴史的事實の研究にあつて特に社會的要素を重する傾向を人々は近代と呼んでゐる。個人主義的方法(Individualistische Methode)を斥けて、集團主義的方法(Kollektivistische Methode)によつて史的現象を理解せんとするのが世界史であるか。世界史も、それが歴史的經驗を對象とすべきである限り、また事實に忠實でなければならぬ。そして事實は、歴史が英雄や天才の活動によつて専ら動かされてゐると云ふ思想を證明しないと同様に、それが民族心や社會心によつて只管支配されてゐるとみる見解に保證を與へないのである。然らば世界史とは最體系的な歴史の謂であるか。科學史、哲學史、宗教史などが記録し、提供する知識を組織的に論述するのが世界史の職分であるのだらうか。歴史が體系的に組織されるためには何等かの根本原理が豫想されねばならぬ。ヘーゲルは自己の形而上學的思想に基いて世界史の意味に就て次のやうに語いた。„Die Weltgeschichte ist der Fortschritt im Bewusstsein der Freiheit, ein Fortschritt, der wir in seiner Notwendigkeit zu erkennen haben.“ 然しながら私達は歴史の發展の必然性、殊にその辯證法的必然性を論證すべき道を知らない。哲學の示す形而上學的原理はプロクラステスの寝床のやうなものである。彼は自己をあらゆる事實に適合させるために、事實を抑壓し、事實に暴力を加へなければならぬ。史學を認識論的基礎の上におきその獨立性と特異性を確立しようとする人々は世界史の課題に就て次のやうに考へるでもあらう。政治史や藝術史や宗教史などが、それに關係せしめられて成立する、政治、藝術、宗教などの如き諸文化價值は、一の體系に紐立てられその中に於て一定の必然的位置の指示されることを必要とする。今、價值の體系にして組織されるならば、このやうな體系に關係せしめて理解される一の歴史的全體が世界史である。然しながら私達は、形式論的認識論の立場に停る限り、諸の文化價值の間に一定の次序または段階を定めることが出来ないのではないか。價值の體系を定立すると云ふことは、寧ろ世界觀、人生觀の問題に屬するのではないだらうか。一定の人格的確信に従つて世界の歴史的事象の意味を闡明しようとする者は、嘗て多くの神學的歴史哲學者の陥つた如く、獨斷と偏狹とから遁れることが出来ないであらう。然のみならず價值は私達の歴史的活動によつて發見されるべきもの、創造さ

るべきものであるが故、究極的に妥當し、完結した價値の體系を構成することは不可能である。今一步を譲つて全く形式的に價値の體系が組織され得るとしてもかゝる體系に關係させて理解された世界史は結局一定の價値體系の Illustration としての意味しかもち得ないことになりはしないかを恐れる。この場合歴史家は要するに、哲學者が作つた建築の、時には或部分に、時には他の部分に、イルミネーションを施す電気技師に過ぎないのである。それ故に右の思想に對しては、私達は、ランケが "Jede Epoche ist unmittelbar zu Gott." と云つた如く、歴史なるものゝ權利 (Das Recht des Geschichtlichen) を殊に力強く主張せねばならぬであらう。

然らば個々の文化價値に關係する個々の歴史から獨立に特に世界史と名づけらるべきものは存在しないのであるか。世界史とは歴史家の單なる興味や確信や世界觀に従つて、或場合には或價値に、他の場合他の價値に、關係する史的事實を編んだ *belles lettres* に過ぎないだらうか。けれど多くの歴史家は事實上全く異つた觀念をもつてをる。彼等は世界史が近代史學の誇であり、また殊に學の名に價することを疑はなないのである。私達はこの事實を如何に考ふべきであるか。蓋し歴史の過程は特に、人間的な現象である。従て歴史的全體若くは歴史的宇宙の概念を構成せしめるもの

は、人類 (*Menschheit*) の概念である。固よりこの概念は事實として與へられるものではなく、私達の歴史的活動の總體に於て實現さるべき理念である。今それ自身一回的なる、繰返さざる歴史的全體の個性を理解するにあつて關係せしめらるべき價値は、何よりも人類の理念であらう。そして人類の理念に關係せしめて歴史的宇宙の個性的發展を理解せんとするものこそ世界史ではないか。尤人類の理念は、政治、藝術、宗教の如き他の諸文化價値のやうに、それ自ら直接に歴史的活動の理想となることが出来ない。それはこれら他の諸文化價値を通して初めて實現さるべき理念である。寧ろ凡ての文化價値は悉く人類の理念を目指してをると云ふことが出来よう。なぜかならば、文化價値の本質はそれの普遍妥當性にある。従てそれは現實にあつては一切の人間によつてまたに於て實現さるべきことを要求するからである。即ち自體に於ては超越的、絶對的なる理性價値の現實界に於ける實現の最高の目標は、人類の理念である。さて歴史的宇宙の發展を顧るとき、私達は、或時代にあつては或理性價値が、他の時代に於ては他の理性價値が、特に鮮明に、また深遠に人類の理念を實現してゐるのを見るのである。人類の理念の諸文化價値に於ける斯の如き *individuelle Gliederung* の個性的發展を、歴史的宇宙の中に辿らうとするのが世界史である。かゝる見地からしてのみ私達は

個々の特殊歴史に對する世界史の位置と意味とを決定することが出来ると思ふ。

坂口教授の著書が提供しようとするのは世界史の知識である。

それは「現下のわが讀書界にとりて特に缺乏するものを」満すべき要求を以て世に出た。私はこの書によつて讀者が歴史に對する正しき觀念を獲得することを期待する。私達の國では歴史は長い間不當な取扱を受けて來た。人々が歴史に多くの興味を寄せなかつたことは、佛教によつて發はれた汎神論的思想の影響にも原因するであらう。けれども私達は一層甚しく歴史を書した、頑冥なる道學者と偏狹なる愛國者との誤れる歴史の尊重から解放されて歴史を自由なる學的觀照の下に持來さなければならぬ。歴史は一定の道德説、國家觀若くは國體論の *Schloßhik* の具として考へらるべきではない。人が歴史によつて何等かの確信を得べきであるとすれば、それは *Idee der Menschheit* に對する信仰でなければならぬ。そして世界史は特にそのことを教へるであらう。更に私達は自然科学に援けられた唯物的、實利的人生觀より來る歴史的認識に對する無關心と輕蔑とから自由にされて、それに純粹なる愛と尊敬とを向けることを學ばねばならない。そして今の時代に於ては特にそのことが必要である。なぜなら私達は今「人類の理念」が新しい勢を以て、新しい方向に展開され、實現さ

れつゝあるのをまのあたり感ぜずにはゐられないからである。この書の著者の言葉によれば斯うである。「吾人は、今日血肉共に親しく痛切に經驗しつゝあるこの世界史の危機に於て、或はいつの間にか、吾人が今日まで欠しく生活して來たその第三日を去つて、或る何物かの新しい第四日に入りつゝあるのかも知れない。宛もかの高緯度にある地方の夏の一日が、その暮れがてなる夕を浮かれ歩く者の知らず識らずの間に、明るる日のあしたとなつてをるがやうに。」

概観世界史潮(東京岩波書店)、内容。

一、古今の關係 古典と現代。二、希臘國民的文明。三、希臘世界的文明。四、羅馬共和國の發展。五、羅馬帝國の文明。六、基督教の興起加特力教會の成立。七、古代より中古(原始ゲルマニ文明。八、羅馬風ゲルマニ風社會の成立。九、羅馬風ゲルマニ風社會の發展。一〇、ビザンツ文明回教文明。一一、十字軍。一二、十字軍時代及戰役の西歐社會。一三、近代國家の起源。一四、學藝復興。一五、教會改革及其の反動。一六、世界の擴大五大強の成立。一七、十七八世紀に於ける思潮。一八、フランス大革命ナポレオン戰役。一九、自由主義及國民主義の發展。二〇、十九世紀の思潮學藝及其の應用。二一、國民的國家の建設。二二、三國同

盟列強の通商植民。二三、民主・社會・博愛・平和・主義的運動。二四、世界政策の衝突。二五、世界職役世界改造。

(一九二〇・一〇・九。三木清)

寄贈書籍雜誌

哲學雜誌、丁酉倫理講演集、心理研究、東洋哲學、一六合雜誌、東亞之光、支那學、六條學報、學校教育、教育、内外教育評論、教育學術界、教育界、教育研究、教育時論、日華公論、佛教學雜誌

パイクレー人智の原理及對話

最近社會學の進歩

文學士 善浪達童譯
東京 大村書店發行

大日本學術協會